

松沢伸二 (2010). 「英語教育評価論」. 石川祥一・西田正・斉田智里 (編著). 『テストと評価 4 技能の測定から大学入試まで』 (59–86 頁). 東京: 大修館書店.

第3章 英語教育評価論

2. 熟達度の評価 (pp. 71-78)

- 共通英語の成績評価は、熟達度テストが測定する英語力と同じか？
 - ・共通英語の到達度テストは、授業を通して学習者の知識や技能がどれだけ向上したかを評価するものであり、熟達度の評価をするものではない。
 - ・しかし、授業を通して向上させたい英語力が、ある熟達度テスト (e.g., TOEFL) が測定する英語力と同じで、最終到達度テストが目標基準準拠で作成されていれば、テストの形式や内容は当該熟達度テストと同様なものになる (Hughes, 1989).
 - ・例えば、学問目的の英語 (EAP) の熟達度テストには TOEFL, IELTS が存在するが、大学で行われる EAP 科目の到達目標が TOEFL などと同じであれば、授業の到達度テストと TOEFL のような熟達度テストとの間に差はないと言える。

- EAP の到達度テストと TOEFL が似てくる理由は何か？

(1) ニーズ分析から到達目標が抽出されている。

(2) TOEFL や IELTS の波及効果。

- ・「大学生に求められる英語力」というニーズに対し、「専門書を読み、論文を書き、また学会などで学術発表ができること、また、卒業して社会に出たときに種々の職場で仕事の道具として使いこなせること」という目標を立てた (長畑, 2009).
- ・一方、TOEFL では "read a passage from a textbook and listen to a lecture and then speak or write in response, just like you would in a classroom" とされている (ETS, 2010).
 - 実際に、到達度テストの代わりに TOEFL などを使う大学もある (Davies et al., 1999).

2.1 クラス編成

- 授業は EGP・EAP などの目的別で開講されるのに対し、編成するクラスは (a) 能力混成クラス (b) 能力別 / 習熟度別クラスのどちらかになる。
- 大学全入時代になり、リメディアル英語なども開講されるようになったため、教育効果を上げる意図で能力別にクラスを編成する大学が増えている。
 - placement test を通して等質能力クラスを編成している。

- placement の種類と実施方法

- ・新入生の英語熟達度を測定するには外部テストが主に使用されている (e.g., TOEIC-ITP, Criterion, Interchange Objective Placement Test, センター試験).
- ・4月の placement test でクラス分けをする場合もあれば、1学期末のテスト得点で第2学期のクラス編成をする大学もある。
- ・クラス編成後も学習者が自分のレベルに合わない申し出た場合、そのクラスの配置換えを容易にすることで placement test は low stakes になる。

■ placement test によるクラス編成の問題点

- それぞれの難易度にある授業で、最終到達度試験が他のレベルのテストと異なる。
- もし難易度の低いテストを受けていれば、成績が良かったのではないかと学習者からの不満が生じる。
 - 成績評価の尺度で (1) レベル内尺度 (2) 校内尺度 (3) レベル内・校内尺度の合成尺度がある。(1) ではクラス別に成績を付けるためレベルの高い学生からの不満が出る。(2) では校内全体で成績を付けるためレベルの低い学生の達成感が損なわれる。
 - (3) による成績評価を行うため、校内で共通のテストを行い、その結果を最終評価の 20%に含めてレベル間の統一を保つ工夫がなされている (齊田・有田, 2010)。

2.2 学力証明

- 目標基準準拠のコミュニケーションな評価方法を英語授業の評価で可能にするために、本節では「最終評価を広く社会に認知されている熟達度試験に委ねる案」を扱う。
- 教養教育科目の成績評価に学外機関が実施する熟達度テストを用いる場合...
 - (1) 大学のカリキュラムに関与しない学外機関が実施するテストを用いる (e.g., 名古屋大)。
 - (2) 大学のカリキュラムに関与する学外機関が実施するテストを用いる (e.g., 北京科技大)。
 - (3) 大学が学外機関に関与して作成したテストを用いる (e.g., ヴェニス大)。

[名古屋大の取り組み]

- 中級英語の成績評価に TOEIC-ITP のリーディングセクション, Criterion の成績を組み入れた。また、コミュニケーション英語の成績評価に TOEFL-ITP のリスニングセクションの成績を組み入れることにした。
- 共通英語科目の成績が「世界的尺度」により位置づけられるようになり、学習者は自信の英語力を様々な基準に当てはめることができるようになった。
- さらに、大学での英語学習と社会、世界とのより強い連続性をもたらすことになり、英語学習の強い動機づけにつながることを期待されている。
 - 大学のカリキュラムに関与しない ETS が提供する熟達度テストの活用事例。

[北京科技大の取り組み]

- 国家統一カリキュラムに定められている College English Band (CEB) に従い、授業は 1 学期で 1 Band 上に到達するよう進められている。
- 北京科技大では 2 年次に Band 4 (1~6) の College English Test (CET) に合格することが義務付けられており、CET の突破が学習者にとっての最大の英語学習目標となる。
- 共通英語科目で単位を取ることの学力証明は、国が定めた目標基準への到達という国内外に通用する明確な形で示されることになる。
 - 自校のカリキュラムに関与する試験実施団体 (国家) が提供する熟達度テストを用いるケース。

[ヴェニス大学の取り組み]

- 学外機関である Trinity College London が実施する the Integrated Skills in English (ISE) を英語力テストとして採用している。ヴェニス大学は Trinity と協議して ISE の試験内容を一部変更し、学生の学部卒業時の最低レベルの判定に用いている。

- ニーズ分析を通して設定した到達目標と熟達度試験が一致しない場合、ヴェニス大学のように外部熟達度試験の内容に大学が関与する姿勢を持つことは重要である。
- このような配慮のもと、共通英語の授業で外部熟達度試験を用いることには以下のメリットがある。
 - (a) 学習を通して「できるようになったこと」を関係者に明示できる。
 - (b) 「国際的通用性を備えた」尺度を導入できる。
 - (c) 「英語力の底上げおよび最低限の出口保証」を可能にする。
- 大学英語教育のガラパゴス化を防ぐために。
 - ・評価結果が学習者の今後の学びを支え、就職や進学に有効に活用されることが重要になる。現行の成績証明書は様々な評価の観点の削ぎ落とししたものであるため、大学は学習ポートフォリオを導入するなどの工夫を必要とする。
 - ・学習ポートフォリオの1つである European language portfolio: Adult version (CILT, 2007) は CEFR に準拠しており、① 到達した言語技能のレベルや熟達度試験の成績を記録する、② 学習目標を設定し、自己評価をしながら学習を進めるための記録、③ 学習成果を資料集として保管する機能がある。
 - ・日本の大学でも国際的通用性を備えた尺度を用いた評価の記録が求められる。

3. 教育活動の評価 (pp. 78-85)

- 教育評価を通して授業を振り返る。
 - ・英語の授業を通して学習者の「知識・理解・技能・認識・態度」の変容について情報を収集し、分析と解釈を加えることで可否などの価値判断を行う (学力評価, 学習評価)。
 - ・このような評価結果に基づき、教師は自分の授業の指導内容を振り返り、試験内容や方法を見直す必要がある (授業評価, 教材評価, カリキュラム評価, 教育課程評価)。
 - ・教育評価には学習者の学びの成果を評価対象にする場合 (assessment) と、教育活動の全般を評価対象にする場合 (evaluation) がある。assessment を evaluation に活かすことは「指導と評価の一体化」と呼ばれ、次のような手順で行われる。
 - (1) Plan: 学校における教育課程の編成や、それに基づいた各教科等の学習指導の目標や内容のほか、評価規準や評価方法等、評価の計画も含めた指導計画や指導案の組織的な作成。
 - (2) Do: 指導計画を踏まえた教育活動の実施。
 - (3) Check: 児童生徒の学習状況の評価 (assessment), それを踏まえた授業や指導計画等の評価 (evaluation)。
 - (4) Action: 評価を踏まえた授業改善や個に応じた指導の充実、指導計画等の改善。
 - 頭文字をとって PDCA サイクルと呼ばれる。

3.1 授業改善

- 共通英語科目の授業評価には ① 授業者自身、② 授業者の同僚、③ 管理職者、④ 学習者が関わる。
- 授業評価には (a) 授業をより良いものにするために行う形成的評価 (formative evaluation) と、教員の授業力を査定するために行う総括的評価 (summative evaluation) がある。

	形成的評価	総括的評価
授業者	自身の成長のため	
同僚	授業者の成長のため	
管理職		説明責任を果たすための教員評価
学習者		より良い授業に改善されることを願うため

- ・これらの授業評価のうち、授業者自身が行う形成的評価が最も授業改善に寄与する (PDCA サイクルの Check にあたる).
- ・教師が自分の授業を振り返って授業改善を行うことを省察という。省察には (a) 授業の音声や動画による記録, (b) 授業参観者のフィードバック, (c) 学習者の感想などのデータを用いる。
- ・データに基づき、授業内容のチェックリストに回答して省察を深め、次の授業に向けて自分の授業の改善を図ること、および授業評価の方法自体を評価することが重要になる。

3.2 教育課程改善

- 共通英語の科目群が全体として価値ある学習成果を生み出しているかを点検し、不十分なところがあればその改善を目指す必要がある → 教育課程評価, *course evaluation, programme evaluation*.
- 共通英語の教育課程評価は、1999 年に義務化された自己点検自己評価の一環として実施される場合もある。日本の大学が「入難出易」と言われる原因として「教育内容・方法, 学修の評価を通じた質の管理が緩い」(中央教育審議会, 2008) が挙げられる。
- したがって、共通英語科目群の科目内容・配列を考慮した教育課程が編成されているか、組織として達成すべき学習成果を明確に記述しているか、それが達成されたかを検証することが重要になる。
- ここでも、教育により「できるようになったこと」を可視化するためには通用性のある学外基準が必要になる。こうした評価活動は過度な規範主義であるとする意見もある一方で、学習指導・評価・学位を導く共通枠の必要性が強く認識されている (McNeill, Spöring, & Hartley, 2004).
- 今後は授業評価と教育課程評価の実践研究 (齊田, 2009; 齊田・有田, 2010) を参考にしつつ、「国際的通用性を備えた」学外のベンチマークを尺度にする教育課程評価を実施して、大学教育の「ガラパゴス化」を避けるようにしなければならない。

おわりに (pp. 85-86)

- 中央教育審議会 (2008) は大学が培うべき汎用的技能の 1 つとして「日本語と特定の外国語を用いて読み、書き、聞き、話すことができる」コミュニケーション・スキルをあげている。特に英語力については「バランスのとれたコミュニケーション能力の育成を重視するとともに、専門教育との関連付けに留意する」ことを求めている。
- そのため、全国の大学は学問目的の英語 (EAP) や職業目的の英語 (ESP) などの目的別授業を増やしている。一方で英米文学などの教養を身につけさせる目的の授業は減少しつつある。
 - 「実践的コミュニケーション能力」の育成を主要言語目標・「言語や文化に対する理解」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を準言語的目標とする見方もある (松沢, 2002).
 - グローバルな相互依存が深まる知識基盤社会の時代を迎えるにあたって、大学英語教育は、英語のスキルを伸長する主要言語目標の育成をこれまで以上に重視し、複眼的思考や国際的視野といった目標は準言語的目標として位置付けることが求められる。